



小オンリー
小型テイマーの
辺境開拓スローライフ3

小さいからって何もできないわけじゃない!

Ryuto Watari

著 渡琉兎

イラストしば

〈ティナ〉

辺境領で暮らす、
元気いっぱいな少女。
リドルの従魔ともすぐ友達に。

〈ガズン〉

冒険者パーティ
「明星」のリーダー。
真面目で頼れる青年剣士。

〈エルダー〉

伝説の存在である
エンシェントドラゴン。
普段は人化し、リドルの
家で暮らしている。

〈ティック〉

ボルティックマウスという
種族のネズミ魔獣。
意外な特技を持っているらしい。

〈リドル〉

本作の主人公。
小型魔獣しかテイムできない
スキル「小型オンリーテイム」を
授かったせいで辺境領に追放される。
優しい性格で、
従魔たちとは超仲良し。

〈レオ〉

リドルが最初に出会った
子犬の魔獣。
添い寝が大好きな甘えん坊だが、
凶悪魔獣モ案に倒しちゃう！

〈ルナ〉

リドルが二番目に出会った
子猫の魔獣。
花を愛するきれい好きな女の子。
炎魔法が超得意。

Characters

登場人物紹介

◆◆◆第一章…リディアルの課題◆◆◆

日本のサラリーマンとして深夜残業に取り組んでいた男性——六井五郎は、突如視界が暗くなり、気づいた時には貴族家の長男、リドル・ブリードに転生していた。

転生した世界には『スキル』と呼ばれる特殊な力が存在しており、リドルは『小型オンリーティム』というスキルを授かった。

しかし、大型魔獣が強く有用で、小型魔獣は弱く無能という思想が異世界にははびこっており、リドルはティマー一族であるブリード家から、未開地の開拓を名目に追放されてしまう。

彼は小型従魔のレオとルナと共にブリード家を飛び出すと、流れの商人であるルッツと共に旅立ち、魔獣に襲われている少女ティナを助け、彼女の案内で未開地唯一の村へとたどり着いた。

そこでリドルは、村長でティナの親であるナイルやその妻のルミナ、大工職人のコーワンを中心とした村の人たちと協力し、村を大きくしていった。

ティムしている小型従魔も増えていき、グラスモグラのグース、黄金コロガシのゴンコ、小人ゴーレムのミニゴレ、ゴレキチにゴレオにゴレミだけではなく、ネームド魔獣と呼ばれるカンガ

ルー型のレア魔獣、ブレイクチャンピオンのガルオンと従魔契約を果たした。

さらに村の名前を「リディアル」とし、ルッツと共にリディアルにやってきた若手商人であるアグリコを新たな住民に加えた。だが、これからさらに村を発展させていこうとした最中、突如として、強大な存在であるエンシエントドラゴンが飛来する。

ルッツの護衛としてリディアルを訪れていた冒険者パーティ『明星』のガズン、ミシヤ、オルフェンの力を借り、リドルはエンシエントドラゴンのエルダーと対峙した。

レオとルナ、そしてガルオンがリドルの魔力を吸収して戦い、それでもなおエルダー優位だった。しかし、最終的にはリドルの説得によりエルダーは矛を収め、リディアル全体でおもてなしをしたこともあり、エルダーはリドルと契約し、リディアルの守護竜になることになった。

こうして予想外の住民が加わったリディアルで、村の生活を良くするためのリドルの一日が始まるうとしていた。



「リディアルをより良くする案を募集します！」

集まりの席で、俺——リドルは突如としてその声を上げた。

場所は村長であるナイルさんの屋敷、そのリビングだ。

集まりの席にはナイルさん一家は当然として、コーワンさん、ルッツさん、アグリコさん、そして『明星』のメンバーであるガズンさん、ミシヤさん、オルフェンさんが揃っている。

レオとルナを始め、そのほかの従魔たちはリディアルの公園で子供たちと遊んでおり、不在だ。ティナもいない。

「……突然どうしたんだい、リドル君？」

当然の疑問をナイルさんが口にした。

「今までは村の人たちの生活を良くしようと考えてきましたが、そろそろ外から人が来た時のことも考えるべきかなと思っただけです！」

現状、リディアルは食糧改善や家屋改善を経て、完全な自給自足を成り立たせている。

むしろ、食糧に関しては余りが出てきており、流れの商人であるルッツさんにある程度売っている状況だ。

このような状況でよりリディアルを発展させるなら、外から人を呼び寄せる必要があると俺は考えた。

もちろん、村人の平和を守るのは前提の上である。

「最近になって私もそのことを考えたことはある。しかしだな……」

ナイルさんも同じことを考えたことがあるようだが……。

「何かあるんですか？」

「……リディアルの外、世間一般と言えはいいだろうか。ここでは小型従魔は忌避きひされているのだから？」

ナイルさんの言葉を受けて、俺はハツとした表情になる。

「それは、そうですね」

「情けない話だが、リディアルの防衛ぼうぎの要はリドル君であり、レオやルナ、ガルオンといった小型従魔たちだ。そんな従魔たちに対し、外から来た人たちが酷ひどい態度を取ると、問題が起きてしまうのではないかと思ったんだ」

「そのことに関しては、俺も同意見だ」

そこへ口を挟んできたのはガズンさんだ。

「他の都市でも小型従魔に対する偏見へんけんの目はあるから、ナイル殿の意見はもつともだと思おうぞ。

まあ、リドル殿の故郷であるブリード領はその中でも特に顕著けんちやくだとは思おうが」

ガズンさんたちは冒険者として様々な都市を行き来している。

その経験から来る意見はとも貴重なもので、俺はグツと奥歯を噛かんでしまう。

「……ってことは、何か？ 外から人を招まねくには、リドルに頼らない戦力が必要ってことか？」

やや乱暴な口調で意見を出してきたのは、大工のコーワンさんだ。

「そうなると思いますが、リディアルでそれができるのは俺たち明星くらいだと思います」

「つていうか、冒険者が私たちしかないもんね」

「協力はするが、俺たちだけでリディアル全体を見回るのは正直、無理があるぞ」

ガズンさん、ミシャさん、オルフェンさんが意見を口にしていく。

「……自警団じけいだんが、必要かもしれないな」

ボソリと俺が呟くと、全員の視線がこちらに集まった。

「自警団かい？」

俺の言葉にナイルさんが反応し、思案顔になる。

「あ、いえ……大人の人たちで結成された自警団なら、小型従魔よりも多少は影響力があるんじゃないかと思ってます」

「今までは、こんな辺境の村に人が来るなんてほとんどなかったから気にしていなかったが、外から人が来るとなれば、確かに自警団は必要になるかもしれないね」

「お！ そんなじゃ俺が立候補してやるうか？」

するとここでコーワンさんが手を上げてきたので、俺は驚きの声を漏もらしてしまう。

「え？ コーワンさんがですか？」

「なんだ？ 俺じゃあ力不足だって言いたいのか？」

「違いますけど、コーワンさんって大工ですよ？ ケンカとかも強かったりするんですか？」

自警団ともなれば、諍い^{いさか}を力ずくで取り押さえることも出てくるだろう。

そうなれば当然、腕っぷしが強くなければ意味がない。

特に、外から人が入ってくるのであれば、腕に自信があるだろう冒険者たちが来ることも想定しなければならぬ。

自警団が冒険者たちにあっさりやられてしまうようでは、人々に舐め^なられて暴れ放題の街にされてしまう可能性だっけ否定できないのだ。

「大工で鍛えたこの筋肉！ どうだ、すごくねえか？」

俺の疑問にコーワンさんは、力こぶを作りながら答えてくれたが、俺の求めている答えはそういうものじゃないんだよなあ。

「……はいはい」

「はいはい、じゃねえよ！ ってか、それならエルダー様をお願いしたらいいんじゃないのか？」

コーワンさんは声を荒らげながらその口にしたが、それこそ一番選べない選択肢だ。

「エルダーからは、守護竜になるけど、そのせいで俺たちの成長が止まるのは望まないと云われました。もしそんなことになれば、もう一度エルダーが敵に回る可能性も——」

「よし！ それは止めておこう！ 絶対にだ！」

俺が以前エルダーから言われたことを伝えると、コーワンさんはすぐに話を撤回^{てつかく}してくれた。

「ガズンさんたちに自警団を依頼することもできますか？」

俺がすかさずガズンさんたちに話を振ると、彼らは渋面^{じゆうめん}になりながら口を開く。

「依頼として受けることは可能だが、常にリアルに張り付いているわけにはいかないぞ？」

「一応、魔獣狩りも私たちの仕事に入っているからね」

ガズンさんとミシャさんがそれぞれ懸念^{けんねん}点を挙げていく中、オルフェンさんだけは別の案を出してくれた。

「ってか、それよりも時間を見つけて、村人を自警団として鍛える方がいいんじゃないか？」

「それいいですね、オルフェンさん！」

俺が思わず答えるが、オルフェンさんは何気なく意見を言ったただだったのか、意外そうな顔をした。

「そうか？ でも、自警団なんて危険な仕事に、立候補する奴なんているのか？」

「俺はやるぞ！ 大工仕事ばかりだと、つまらねえからな！」

一人は確定っと。

よし、このまま人を集めよう。

「それじゃあコーワンさんは確定として、残りはナイルさんに話を広げてもらいましょう。いいですか、ナイルさん？」

「分かったよ。それなら、明後日くらいに一度、希望者を私の屋敷の前に集めようか？」

「お願いします！」

自警団をすぐに形にするのは難しいかもしれないが、それでも準備はしておいた方がいい。何かあつてからでは、あまりにも遅すぎる。

「それじゃあ、自警団については明後日以降に、本格的な話を進めていきましょう」

俺がそう告げると、コーワンさんが渋面になる。

「他にもまだあるのか？」

「当然ですよ！ 今のリアルディアルの規模で、外から人が来た時に対応できると思いませんか？ 絶対に無理です！ ガズンさんたちが来た時ですら、村人の家に泊めていたんですよ！」

「……お、おう、分かった」

俺が熱弁すると、コーワンさんは若干引き気味になりながら答えた。

だが、俺は間違つたことは言っていない。

その証拠に、ナイルさんやルミナさんは大きく頷いてくれている。

「確かに、今回はルツツさんが信頼している人たちだったから許したようなものだが、そうでなけ

れば村人の家に泊めるのはさすがに危険だからね」

「本当に、ガズンさんたちやアグリコさんがいい人でよかつたわ」

二人がそう口にするのと、アグリコさんとガズンさんたちは、ホッと胸を撫で下ろしたかのように息を吐いた。

「……だが、確かに宿は急務だと思うぞ、リドル殿」

続けてガズンさんが口を開き、そう提案してくれた。

「やっぱり、そうですねー」

「エンシエントドラゴンがこの村に出現したと世間に知られば、特に冒険者が集まるだろう。ドラゴンの素材を手に入れることができれば、一攫千金も夢じゃないからな」

「……そんなにすごいんですね、ドラゴンの素材って」

俺が思わず呟くと、ガズンさんは呆れたような顔で教えてくれる。

「ドラゴンの種類にもよるが、ものによっては鱗一枚で二世代が遊んで暮らせるだけの富を得られるらしいからな」

「ええっ!? に、二世代がですか!!」

「ああ。もしもの話だが、エンシエントドラゴンのエルダー様の鱗となれば、何世代先まで遊んで暮らせるのか、想像もつかないくらいだ」

……エルダーって、そんなにすごいんだな。

まあ、エンシェントドラゴンってめちゃくちゃ長生きらしいし、素材の価値もかなりの高さなのだろう。

しかし、今回はその価値の高さが厄介でもある。

「となると、自警団と宿はほとんど同時進行で進めないといけないうことでですね？」

俺の疑問に、ガズンさんは頷く。

「ああ。しかし、そうなるともう一つ、問題が浮上してしまう」

「その問題って言うのは？」

ガズンさんが真剣な面持ちになりそう口にしたので、俺も真剣に聞き返した。

「……リディアルの大工は誰だ？」

「誰って、コーワンさんですけど？」

「そのコーワンさんは、何に立候補している？」

「何にって、自警団……あれ？」

俺がそう答えると、全員の視線がコーワンさんに集まった。

「………待って待って！ ってことは何か？ 俺は自警団の訓練をしながら、宿まで建てなきゃならんってことかよ!!」

「……頑張りましょうね、コーワンさん。しばらく、お酒抜きでいきましよう」

「んなあああああああつ!? リドル、それはさすがにないだろおおおおおおおつ!!」
俺たちの話し合いは、コーワンさんの悲痛な叫びで幕を下ろしたのだった。

話し合いが終わり、俺はナイルさんの屋敷をあとにした。

レオたちを迎えに行こうと公園へ歩いていたのだが、そこへ声を掛けられる。

「リドル殿、少しいいか？」

振り返ると、そこにはガズンさんが立っていた。

まだ屋敷にいると思っていたが、外に出ていたようだ。

「構いませんけど、どうしたんですか？」

「先ほどの話し合いのことで、どうしても伝えておかなければならないことがあってな」
ガズンさんから「どうしても」だなんて、珍しい。

おそらくよっぽどのことだと思い、俺は体ごとガズンさんの方に向いた。

「伺っても？」

「自警団や宿は、冒険者がやってきた時に必要であるから、準備を始めるんだろう？」

「そうですね」

「そうであれば、冒険者ギルドも必要になつてくるはずだ」

冒険者ギルド……あつ！

「た、確かにそうだ!？」

「現状、リアルでの素材の買い取りはルッツ様が請け負っているが、それにも限界があるだろう。個人でやっていることだからな。ならば、多くの冒険者がやってくることを想定して、冒険者ギルドの誘致も必要になるはずだ」

冒険者ギルドは主に冒険者への依頼の管理をし、報酬を支払ったり、功績によつて冒険者をランクづけしたりしている。

またそれだけでなく、魔獣の素材の買い取りなども行つており、冒険者が活動する上では必要不可欠なのだ。

だが、ここに冒険者ギルドはない。それならば、冒険者のガズンさんたちはいったいどうしていったんだろう？

「……もしかして、ガズンさんたちって、ものすごく損をしていましたか？」

冒険者ギルドがないリアルで活動していたのだ。ここでどれだけ活躍してもギルドに評価されることはないはず。

「まあ、評価に関しては多少な」

「ああああああああつ!? 本当にすみませんでしたあああああああああつ!!」

予想が的中してしまい、俺は盛大に謝罪の言葉を口にした。

「いや、構わないさ。俺たちはギルドからの評価はあまり気にしていないからな」

「で、でも……」

「俺たちは既にAランク。規格外の偉業を成し遂げない限り、これ以上ランクを上げるのは無理だからな」

ガズンさんは軽く肩を竦めながらそう口にした。

Aランクよりも上……それって、Sランクってことですか？

俺が心配そうな顔をしていたからか、ガズンさんは優しく笑う。

「だから、リドル殿はあまり気にしないでくれ。それよりも今は、これからやってくるだろう冒険者のこと、そして冒険者ギルドのことを考えてあげてほしい」

「……分かりました」

ガズンさんには甘えてばかりだ。

今度、何かお礼をしないとイケないな。

「でも、冒険者ギルドの誘致か……あれ？ でも、それってどうやるんだろう？」

ふと思ったことを呟くが、わざわざガズンさんが声を掛けてくれたということは……？

「もしかして、ガズンさんは冒険者ギルド誘致の方法を知っているんですか？」

「ああ。知っている。それで、話ができないかと思ったんだ。少し長くなるかもしれないから、俺たちの屋敷でどうだろうか？」

これはありがたい提案だ。

本当に、ガズンさんがリディアルに来てくれて助かったな。

「分かりました。レオたちに話をしてから、すぐにガズンさんたちの屋敷に向かいます」
「分かった。待っているよ」

それから俺は一度ガズンさんと別れると、駆け足で公園へと向かう。

「ガウガウ！」

「ミーミー！」

俺の姿が見えたからか、公園の中央で遊んでいたレオとルナが嬉しそうに鳴きながら駆け寄ってきた。

「あ！ リドルだー！」

「よっ！」

すると今度はティナと、コーワンさんの子供であるラグが声を掛けてきた。

「レオ、ルナ！ みんなも、お疲れ様！」

俺がレオとルナを撫でまわしていると、他の従魔たちも集まってきた。

とはいえ、この場にいるのは全員ではない。

グースとゴンコはそれぞれの縄張りで生活しており、ミニゴレたちも村に来る順番が決まっているのか、この場にはゴレキチとゴレオだけで、ミニゴレとゴレミの姿はなかった。

従魔たちの中でも非常に年上であるガルオンがおり、ベンチに腰掛けて子供たちに危険がないかを見守ってくれていた。

「リドルもこれから遊べるの？」

「実は、これからガズンさんたちと話し合いの続きをすることになったんだ」
嬉しそうに声を掛けてくれたティナだったが、俺が遊べないことを伝えると寂さびしそうな顔になっ

てしまう。

「マジかよ。忙しすぎるだろ、お前」

ラグも渋面になりながら言った。

「本当にごめんな。レオたちは遊んでいいからさ」

「ガウ〜？」

「ミー〜？」

レオとルナはどうしようかと鳴き、最終的にティナたちと遊ぶことを選択した。

おそらくだが、ティナたちが寂しそうにしていたのを見て、俺の代わりに遊ぼうと考えたのだ。
……ありがとう。レオ、ルナ。

「レオとルナが遊んでくれるから、機嫌を直してくれよ。な？」

「……分かった〜」

「次は絶対に遊ぼうな！」

「うん！ ありがとう、ティナ、ラグ！」

ティナとラグにも声を掛けてから、俺は急いでガズンさんたちの屋敷へと向かった。

すぐにガズンさんたちの屋敷に到着すると、俺は扉の前に下がっている紐を引き、呼び鈴を鳴らした。

「来たか、リドル殿」

すると、すぐに扉が開かれてガズンさんが出迎えてくれた。

「お待たせしました」

「そんなことはないさ。さあ、入ってくれ」

ガズンさんが中へ入ることを促してくれたので、俺は会釈をしながら入っていく。

パーティーメンバーの三人全員で暮らしていることもあり、ガズンさんたちの屋敷は二階建てだ。

俺の屋敷よりも大きいので、建てる時はとても遠慮されてしまったが、暮らす人数が多いのであれば、それなりの広さが必要になる。

というわけで、俺の我がままで受け取ってもらった。

「住み心地はいかがですか？」

「快適過ぎて、申し訳ないくらいだ」

「それならよかったです。でも、申し訳なく思う必要はありませんからね？」

満足してくれているようで安心した俺は、リビングで待つてくれていたオルフェンさんとミシヤさんとも顔を合わせた。

「さっきぶりだな、リドル！ この屋敷、マジで最高だぜ！」

「本当にありがとう、リドル君！」

「皆さん、満足してくれているようでよかったです」

屋敷を建ててくれたのはコーワンさんやミニゴレたちだから、あとでみんなにも伝えてあげよう。きつと喜んでくれるはずだ。

「それじゃあ、早速話を進めていこうか」

案内してくれたガズンさんがテーブルにお茶を並べながらそう言うてくれたので、俺も頷く。

「よろしくお願いします」

「冒険者ギルドの誘致についてなんだが……正直、俺たちがいればどうにかなると思う」
「……え？　そ、そうなんですか？」

本題に入って開口一番、俺はまさかの展開に驚きの声を漏らした。

「まあ、俺たちっていうよりは、ガズンがいたらって感じだよな」

「オルフェンの言う通りだよな」

すると今度はオルフェンさんとミシャさんが口を開いた。

しかし、二人ではなくガズンさんがいたらか。

ガズンさんと、オルフェンさんやミシャさんの違いというところ……。

「もしかして、貴族の推薦が必要とかですか？」

以前、ガズンさんとはある貴族家の五男だと聞いたことがある。

俺が疑問を投げかけると、ガズンさんは補足するように答える。

「正確に言えば、他領の貴族だな。その地の領主がもし貴族なら、領主一人で好き勝手に誘致できてしまうだろう？」

「あ、確かにその通りですね」

ガズンさんの説明を聞いて、俺は納得顔で頷いた。

「冒険者ギルドを誘致するには、他領の貴族からの推薦状が必要になってくる。とはいえ、それも

貴族家当主の推薦でなければならない」

「え？　それだと、ガズンさんではダメなのではないですか？」

貴族家の人間だと言っていたガズンさんだが、冒険者になっているのを見て分かるように、彼は貴族家当主ではない。

ガズンさんは五男で、その立場では家においても家督を継ぐことはできないので、家を出て冒険者になったとのこと。

つまり、ガズンさんの推薦では意味がないのではないだろうか。

しかし、ガズンさんは説明を続ける。

「貴族家を出て冒険者なり、別の仕事に就いている者は多くいる。そして、半々くらいで実家との関係が良い者と悪い者がいるんだ」

「今の話の流れで言うと、ガズンさんは実家とは良好な関係を築いていて、お父様に声を掛けてくれるってことですよな？」

「そういうことだ」

なるほど。だからオルフェンさんとミシャさんは、ガズンさんがいれば問題ないと言ったのか。

「ほとんどの貴族は、自領にもメリットがあればという形で冒険者ギルドを他領の都市に誘致するんだが、父上の場合はその条件なしに受けてくれるはずだ」

「お優しい方なんですわね、ガズンさんのお父様は」

「他の貴族がどうなのかは分からないが、少なくとも俺は父上を尊敬しているな」
他からの目を気にせず、そう言い切れる関係は、正直羨ましいと思う。

俺は小型従魔を馬鹿にし、俺を追放した父上のことを尊敬しているとか、絶対に言えないからな。そうなるとお父様の元に行くためにしばらくの間でリディアルを離れることになりますよね？」
俺が気になったことを尋ねると、ガズンさんは頷く。

「うむ。それも仕方がないか」

「リドルのためなら問題ねえだろう」

「うんうん！ それに、なくても困らないけど、あつたらあつたで便利だもんね」

さらにオルフェンさんとミシャさんも答えた。

あ、やっぱりあつた方がいいんだ、冒険者ギルド。

ならやつぱり正式に誘致を頼んだ方が良さだろう。

「それじゃあ、俺からの正式な依頼という形で、お父様へ冒険者ギルド誘致のお願いをしていただく
けますか？ 報酬ももちろん出します」

「依頼という形でなくてもいいんだがな」

ガズンさんは苦笑しながらそう言ってくれたが、ずっと甘えてばかりではいけないと思う。

「俺がお願いしている側なんですわから、それくらいはさせてください」

お互いに持ちつ持たれつでなければ、いずれこの関係が崩れてしまうんじゃないかと不安にも
なってしまうからね。

これはまあ、完全に俺の我がままだ。

「……分かった。確かに、俺たちも自分を安売りするのは良くないか」

「真面目だよー、二人とも」

「本当に。まあ、俺はもらえるもんはもらっておきたい派だけどな！ ありがとよ、リドル！」
ミシャさんとオルフェンさんは軽い口調で答える。

性格の異なる三人だが、それが上手い具合にかみ合って、最高のパーティになっているんだろう。
本当に、ガズンさんたちと知り合えてよかったな。

「これくらいなら当然ですよ」

俺がそう言うと、オルフェンさんとミシャさんは首を横に振る。

「その当然ができない貴族もいるって話なんだよな」

「うんうん、そうなんだよねー」

「……そうなんですか？」

冒険者に依頼をするんだから、報酬を用意するのは当然だと考えていたのだが、どういふことだ

ろうか。

「一部の貴族は、自分たちが偉いのだからと格安で無理難題を吹っかけてくる者もいる。まあ、それでも金を払ってくれるだけでいい方とも言えるかもしれないが」

「それって、本当に無報酬で命令する人もいるってことですか？」

俺がそう問いつけると、ガズンさんたちは渋面になりながら頷いた。

「……マジですか」

「こう言っただけで……ブリード家の当主様は、そっち寄りの人間だったな」

「……………ほんつつつとつとつに、申し訳ございませんでした!!」

まさか父上が……いやバカ親父が三人に依頼をしており、しかもそんな態度を取っていたとは思わず、俺は慌てて謝罪を口にした。

「リドルが謝罪をする必要はないだろう」

「で、ですが……」

「結局、貴族家の対応も人間によって変わるってことだよな」

「リドル君は貴族っぽくないもんね！ もちろん、良い意味だよ！」

「……ありがとうございます」

これはもう、バカ親父のことは未来永劫、良い父上でしたなんて言えないな。

「早ければ三日後にもリディアルを発とうと思うが、どうする？」

「うーん……そうですなぁ……」

突然の提案に、俺は思案してしまう。

というのも、コーワンさんのように、明星の面々にも色々とお願いをしているからだ。

「……自警団の訓練もお願いしている手前、どちらを優先すべきか悩んでいます」

冒険者ギルドも急いだ方がいいのは間違いないのだが、ガズンさんたちが困っていないということであれば、自警団と天秤てんびんにかけてしまう。

「それなら、俺とミシヤが訓練をして、ガズンは親父さんをお願いしていくってのはどうだ？」

「あ！ それなら確かにどっちも問題ないわね！」

「ここからなら危険な魔獣が出そうな場所を通ることもないし、確かにいけそうだな」

何やらパーティを分けるみたいな話になっちゃっているけど、本当にいいのか？

「別行動でも大丈夫なんですか？」

「問題はない。それに、一緒になる前はお互いにソロだったわけだしな」

「それじゃあ、それでいこうぜ！」

「でもでも、早く戻ってきてよね、ガズン！」

こうして俺は、またまたガズンさんたちに助けられながら、冒険者ギルドと自警団の訓練、両方

「それじゃあ俺たちは別の仕事に戻るぞ！　なんせ、やることは山ほどあるからな！」

「「「ゴゴゴゴ……」」」

「ありがとうございますー！」

ミニゴレを付き従えたコーワンさんに手を振りながら、俺は改めて新しく出来上がった部屋に入り、内装を確認する。

元の寝室は完全にエルダー専用になってしまったので、リビングの横の壁を破壊して、新しい部屋を増築してもらった。

そこが俺の……いいや、俺たちの新しい寝室となる。

「どうだ？　レオ、ルナ？」

俺の足元にはレオとルナがいて、興味深げに部屋の中を覗き見ている。

「……ガウガウ！」

「ミーミー！」

最初こそ警戒しながら見ていた二匹も、以前の部屋よりも広く、さらには俺の荷物が運び込まれていると分かったからか、すぐに駆け出し、飛び跳ねている。

「暴れすぎて、物を壊すなよー」

以前にエルダーが大量に壊したせいで、部屋の中のもの的大半が新調したものだ。

部屋だけではなく、家具なども新調したのだから、可能な限り大事に使いたい。

領主とはいえ、贅沢ぜいたくさんま三昧さんまいできるわけではないし、そもそも俺がそういうのを好まない。

そんな気持ちが一匹にも伝わったのか、俺がそう口にした直後に返事をしてくれ、ピタッと動きを止めてくれた。

「気をつけてくれれば、飛び跳ねてもいいからな」

遠慮するあたり本当に可愛いんだから。レオもルナも。

「なんだ！　この部屋は！」

「ここは俺の部屋だからな！　お前の部屋はあっちだぞ、エルダー！」

そこへ人化ひとかしたエルダーが驚きの声を上げながら帰ってきたので、俺は即座にそう宣言した。

こいつは本当は童なのだが、普段は過ごしやすい人の姿でいることも多い。

「む！　私の部屋にしてもいいのだから？　交換してやろうか？」

「結構だ！　ここは俺とレオとルナ、それに従魔たちが休む部屋にするんだからな！」

新しいもの好きなのか、エルダーは物欲ぶつよくしそうに部屋を見回しているが、絶対に譲ゆずらない。譲るつもりもない。

「……いいではないか」

「絶対にダメだからな!!」

それからしばらくは同じやり取りをしていたものの、俺が折れることはなく、最終的にはエルダーが渋々折れてくれた。

「……いやいや、俺に主導権があるからな！折れてくれたって自分で思っていることにびつくりだよ！」

「俺はこのあと出るけど……絶対に中に入るなよ！見るだけだからな！」

「分かっておるわ！」

そう返事をしてくれたので、俺はレオとルナと共に屋敷を出た。

「……本当に、分かっているんだろうな？」

◆◆◆

俺の屋敷を増築した、翌日。

お昼を少し回った時間になっており、今日はナイルさんが集めた、自警団に立候補してくれた人たちが集まる日になっている。

ナイルさんの屋敷前には明星の面々も来てくれており、教官として鋭い視線を向けていた。

「集まってくれたみんな、本当にありがとう！」

集合時間となり、最初にナイルさんが挨拶を始めた。

「リディアルはこれからも、リドル君と共に大きな成長を遂げるだろう。その中で、外からの人間がやってくることも多くなるはずだ。故に、私たちは自らの力でリディアルを守るべく、自警団を設立することを決めた」

それからナイルさんは、リディアルの外の常識では小型魔獣が見下されていること、俺にばかり頼っているのは外の人間に侮られること、明星にお願いして戦い方を指導してもらうことを説明した。

「おいおい、マジかよ……」

「レオもルナも、ガルオンだつてめちゃくちゃ強いだろう？」

「外の人間って、レオたちよりも強いってことか？」

村人たちから様々な声が飛び交うが……違う、そうじゃない。レオたちより強い人間って、あまりいないよ？

「安心してほしい！レオやルナ、ガルオンより強い人間はほとんどいない！」

不安の音が聞こえてきたからか、ここでガズンさんがはつきりとした言葉で言い放つ。

「外の世界では、小型は弱い、大型が強いという風潮がある。俺たちもそう思っていた。レオとルナを侮っていた。だが、今は違う。彼らが俺たちよりも強いことを知っている。だがしかし、強いと分からない人間は、間違ひなく小型従魔を見下し、大きな態度で迫ってくるだろう」

「そうなるよ、嫌な思いをするのはレオやルナたちであり、その主であるリドルだ」

「私たちも協力するから、みんなで強くなって、レオたちを、リドル君を助けよう！」

ガズンさんに続いて、オルフェンさん、ミシャさんが声を上げてくれた。すると集まった村人たちは顔を見合わせ、そして拳を振り上げてくれる。

「ようやく俺たちもリドルを助けてやれるんだ！」

「領主様を助けるぞ！」

「腕っぷしなら自信があるんです！ やってやるぞ！」

至る所から声が上がリ、その全てが「リドルのために」と言ってくれている。

……気恥ずかしいが、これほど嬉しいことはない。

これが、領主をするってことなんだろうな。

「ありがとう、みんな。それではここで、領主様から挨拶をお願いしたいと思う」

「ええっ!? 聞いていないんですけど、ナイルさん!!」

すると突然ナイルさんから挨拶を振られ、俺は大慌てで声を上げた。

「この状況で、リドル君の挨拶がないのはダメだと思ってる。よろしく頼むよ」

俺の横にやってきたナイルさんがそう口になると、そつと俺の背中を押してくれる。

そうして、レオとルナと一緒にみんなの前に立つと、先ほど以上に大きな歓声が上がった。

「[[[[リドル！ リドル！ リドル！ リドル！]]]]」

「……はは。これ、俺の挨拶とか、いらないんじゃないか？」

思わずそう口にしてしまったが、先頭の誰かに聞こえていたのか、前の方から歓声は徐々に静かになっていき、あつという間に静寂が屋敷前を包み込んだ。

……これはこれで、緊張するな。

「えー、ごほん！ ……俺は、未熟な領主です。リディアルという名前がなかった最初の頃はナイルさん、ルミナさん、ティナに助けられました。次にコーワンさんに助けられました。リディアルの外の人たちにも助けられています。ルツさんにアグリコさん、明星の皆さんもそうです。俺は、多くの人たちに助けられ、支えられて、なんとか領主をやれている状況です」

ここで一度言葉を切った俺は、小さく息を吐く。

そして、視線をみんなに向ける。

「……そして今回もまた、皆さんに助けを求めている状況です。そんな頼りない領主ですが、俺は俺なりの方法で、皆さんを助けていきたいと考えています。なのでどうか、力を貸してくれないでしょうか？ よろしくお願いいたします！」

そう、俺だけの力では、リディアルの領主として生きていくことすらできなかった。

そのことを俺は十分に理解している。

だからこそ、俺は自分を助けてくれた人のことを心に留め、感謝し、彼らのために行動しようと思つたのだ。

リディアルのために、俺は俺にできることを、全力で取り組む。

その姿勢は今も、そしてこれからも、絶対に変えてはいけなと思つている。

……だけど、妙だな。

頭を下げているからみんなの反応が見えないのだが、全く声が聞こえてこない。

もしかして、呆れられてしまったのだろうか。

するとここで、俺の足元に立っていたレオとルナが俺の顔を覗き込んできた。

「ガウガウア！」

「ミィミィー！」

何やら興奮しているようなレオとルナ。

そんな二匹の様子が気になり、俺はゆつくりと顔を上げてみた。

「……………な、なんでみんな、笑っているんですか？」

俺がそう口にする、全員で俺の後ろの方を指さしたため、振り返る。

「……………えつとー……ナイルさん？　なんで泣いているんですか？」

「ぐすつ！　……………いや、なんだろうね。リドル君は、立派だなと感じたら、思わず……………ぐすつ！」

……………あのー、これはいつたい、どういう状況なんでしょうか？

「全く。あなたつたら」

そこへルミナさんの呆れた声が聞こえてきた。

「あの、ルミナさん？　ナイルさんはどうして泣いているんですか？」

「うふふ。リドル君の挨拶に、感動したみたいよ？」

……………え？　今の挨拶に、感動する部分なんてあったか？

「私の方こそ、今まで何度も君に助けられた！　ありがとう、リドル君！」

「あ、いや、その……………は、はい」

思わず苦笑しながら答えると、集まった村人からドツと笑いが起きる。

「村長！　領主様が困ってますよー！」

「さすがだな、リドルは！」

「大人を手籠めにするなんてな！」

「て、手籠めになんてしてませんから！」

俺がツッコミを入れると、再びドツと笑いが起きた。

……………ああ、ダメだ。これはもう、收拾がつかない。

「と、とにかく！　皆さん、自警団の一員として、これからよろしくお願いいたします！」

「『はーい!!』」

こ、こんな緩い返事でいいんだろうか。

俺がそんなことを考えながら、横目でガズンさんたちを見る。

「『……』」

あー……三人共、笑っているようで、目が笑ってないわ。

どうやら自警団のみんなは、これから厳しい訓練に打ち込むことになりそうだな、うん。

その後、ガズンさんたちは行動を起こし、自警団の面々と共に魔の森へと向かった。

早速訓練を行うようだが、俺はそれを見送るだけに留めた。

だって、絶対に厳しい訓練が始まるのが目に見えているんだもの。助けを求められる気がしてならないんだもの。

……まあ、助けを求められても助けるつもりはないけど。

自警団の訓練は、明星に一任しているからね！

「あぁー、疲れたー」

というわけで、俺はナイルさんの屋敷で休ませてもらっていた。

椅子に腰掛け、ルミナさんが淹れてくれたお茶をすする。

膝の上にはレオとルナが丸まっており、その温もりでほんわかしてしまう。

「恥ずかしいところを見せてしまったね、リドル君」

するとそこへ、苦笑いしながらナイルさんが戻ってきた。

その近くにはティナとルミナさんもいる。

「そんなことはないですよ。でも……さっきのスピーチの反応には少し驚きましたが……」

俺も俺で苦笑いながらそう返したからか、俺たちはお互いに苦笑いを浮かべ、話題を無理やり変えることにする。

「そ、そういえば！ 自警団もそうですけど、ガズンさんと話をして、冒険者ギルドを誘致することが決まったんです！」

「冒険者ギルドを？ ……確かに、ギルドがなければ冒険者たちを管理するのは難しいか」

ナイルさんも気づいていなかったようだ。

本当にガズンさんの指摘はありがたいものだった。

「なので、冒険者関連は明星の皆さんのおかげでなんとかなりそうなんですけど、もう一つの方がなかなか進まなくて」

「もう一つというと……宿のことだね？」

ナイルさんが確認のためにそう口にしたので、俺は大きく頷いた。

「宿を建てることもそうなんですが、誰に運営を任せるか、それも問題なんですよね」

自警団の時もそうだったが、宿の運営に関しても立候補を募るか、いなければ誰かにお願いする必要があるだろう。

「あら？ それなら私がやってもいいわよ？」

「……ル、ルミナさんが？」

そんなことを考えていると、ルミナさんからまさかの言葉が飛び出した。

「テイナも手伝ってくれるわよね？」

「うん！ 頑張るよ！」

「えっと……いいんですか、ナイルさん？」

家長であるナイルさんに確認を取ると、彼は苦笑しながら首を縦に振る。

「ルミナがやる気になっているなら、やってみてもいいんじゃないか？」

あ、いいんだ。

「そうとなれば、どこに宿を建てるのが問題になってくるね」

するとナイルさんは、すぐに話を進めてくれる。

「冒険者が集まる場所になるから、ナイルさんの屋敷の近くはダメですね。何かあったら大変だ」

「それを言うなら、リドル君の屋敷の近くもダメだろう。領主だぞ？」

「中央近くもダメですね。子供たちが集まる公園がありますから」

「……うーん」

他の場所はリディアルの村人が暮らしている家が立ち並んでおり、そこに宿を建てるのも違う気がする。

ナイルさんも同じように悩んでいるので、考えは同じなのかもしれない。

「それなら、いつそのこと外壁を外に広げて、村を大きくしてしまっただろうかしら？」

そこへルミナさんから予想外の提案がなされた。

「いや、ルミナ。それはさすがに無理があるんじゃないかい？」

「そうかしら？ リドル君が来てからずっと考えていたんだけど、リディアルはもっと大きくなると思うの。それこそ、冒険者だけではなく、多くの商人が足を運ぶような、そんな村にね」

ルミナさんが語りだすと、俺たちは口を閉じ、耳を傾ける。

「リディアルの特産品と言えるものも増えてきて、ドラゴンの素材が取れると広まったら、今のリディアルに収まり切らない人が押し寄せられるかもしれないわよ？」

「それは、俺も考えていました」

「リドル君まで」

ナイルさんは疑問に思っているようだが、既に宿をどこに建てるかで悩んでしまっている。

ならば、リディアルを大きくすることは今後の発展にも大事なことであり、俺はこの時点でモグラの従魔であるグースのことを思い出し出していた。

「……グースが縄張りなわばりにしている場所が、きれいな花畑なんです」

「どうしたんだい、急に？」

「俺はその花畑を見て、グースのためならここまで村を広げてもいいと思っていたことを、思い出しました」

「お花畑！ 私も見てみたい！」

俺がその言葉にすると、ティナが手を上げながらそう口にした。

「本当にありかもかもしれませんよ、ナイルさん」

「できると思うかい、リドル君？」

「できません。俺だけじゃ無理だけど、従魔たちや、リディアルのみんなの力を借りれば！」

食糧改善の時にはグースとゴンコが、家屋改善や外壁を作る時にはミニゴレたちが、それぞれの強みを活かしてくれた。

それに今ならギーベやガルオン、従魔ではないがエルダーもいてくれる。

まあ、エルダーが力を貸してくれるかは分からないけど、それでも頼れる存在は以前と比べても多くなっているのだ。

ならば、できないはずがない。あの時にできたのだから。

「……分かった。ならば、私も腹をくくるとしよう」

「ナイルさん！」

「リディアルのためにも、村のみんなのためにも、外壁を広げて敷地を確保し、そこに宿を建てるとしようじゃないか！」

予想よりも早く、宿の方針は固まった。

あとは、グースやゴンコ、ミニゴレたちにも事情を説明して、協力と了承を得なければならぬ。

「そうと決まれば、すぐにグースたちのところへ行つてきます！」

「ちよつと待ちなさい！」

俺がナイルさんの屋敷を飛び出そうとしたところ、ルミナさんから待ったが掛かった。

「……どうしたんですか？」

「外を見てごらんなさい。もう夜よ？」

「え？」

俺は思わず驚きの声を漏らし、玄関から外を見る。

するとルミナさんが言ったように、既に夕日もなく、外は真っ暗になっていた。

「……いつの間に？」

「話に熱が入って、気がつかなかったようだね」

そういえば、自警団の集まりもお昼を回ったあとだったっけ。時間が経つのは早いものだな。

「分かりました。それじゃあ、明日はガズンさんの見送りもあるし、そのあとにグースたちのところへ行きたいと思います」

「その方がいいわ。それと、せっかくだし今日はこっちで晩ご飯を食べていきませんか？」

「わーい！ リドルとご飯だー！」

続けて提案された言葉に、ティナが嬉しそうに声を上げた。

「でも、それだとギーベとガルオンも呼ばなきゃいけないんですが……？」

「構わないわ。ねえ、ティナ？」

「うん！」

「それじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

こうして俺は、レオとルナにギーベとガルオンを呼びに行かせた。

ミニゴレとゴレミも今日はリアルにいたが、彼らの主食は岩なので一緒に食べられない。

しばらくしてレオ、ルナ、ギーベ、ガルオンがやってくる、大勢での晩ご飯が始まった。

俺というよりも従魔たちがたくさん食べてしまうので、本当に申し訳なく思っていたのだが、ル

「みなさんもそれを予想していたようだ。」

「さあ！ ドンドン食べてちょうだいね！」

台所からは大量の料理が運ばれてきており、レオたちもお腹いっぱい食べられそうだ。

「……あの、大丈夫なんですか？」

「今日は収穫日で、いつも通り豊作だったの。だから、たくさん作りたい気分だったのよね」

ルミナさんがそう答えると、ナイルさんも頷いてくれている。

そういうことなら、ありがたください。」

「いただきます」

俺もルミナさんの手料理に舌鼓を打ち、英気を養うことができた。

……明日からは、また忙しくなりそうだ。頑張るぞ！



そして、翌早朝。

俺は早起きからすぐに身支度を済ませると、ガズンさんたちの屋敷へと向かう。

それはもちろん、ガズンさんを見送るためだ。

「ガズンさん！」

既に出発の準備を終えていたガズンさんは屋敷の外にいて、俺が声を掛けると振り返り、笑みを浮かべてくれる。

ミシャさんとオルフェンさんも一緒だ。

「なんだ、見送りに来てくれたのか？」

「もちろんです。リディアルのために実家へ帰ってくれませんか？」

そう口にした俺は、ふと疑問に思ったことを聞いてみる。

「そういえば、ガズンさんってどこの家のご出身なんですか？ 貴族家だってことは聞いていましたけど……」

領地持ちの貴族はそこまで多くはない。

俺の場合も俺自身が爵位しやくいを授かったわけではなく、父上の領地を分けてもらっただけなのだ。

とはいえ、分け与えられた時点でこの領地は俺のものであり、父上が返せと言ってきたら、俺はそれに従う必要はない。

……もしも俺が死んでしまつたら、領地は父上かえに還かえつてしまふみたいだけだな。

「俺はラグヴィード侯爵家こうしやくの人間だよ」

「ええっ!? ラ、ラグヴィード侯爵家ですか!!」

ラグヴィード侯爵家と言えば、三大侯爵家の一つであり、武ぶのラグヴィードと呼ばれるほどに屈強な騎士が揃そろっている領地でもある。

ブリード家は伯爵家はくしやくなので、ラグヴィード家の方がブリード家よりも格上ということでもある。

「……俺、めちゃくちゃ失礼な態度を取っていませんでしたか？」

改めて、ガズンさんに失礼をしたんじゃないかと心配になつてしまふ。

「そんなことはないさ。むしろ、冒険者のガズンに対して丁寧ていねいに対応しすぎだと思ふほどだ」

何を心配しているのかが分かつたのだろう、ガズンさんの笑みが柔和にやわなものに変わり、その大きな手で俺の頭を撫でてくれた。

「こっちは俺たちに任せておきな！」

「そうだよ！ 早く戻ってきてほしいけど、たまーの帰郷なんだから、少しくらいゆっくりしてきてもいいんだからね！」

「何も心配はしていないが、なるべく早く戻るよう心がけよう。リディアルに冒険者ギルドを誘致するためだからな」

オルフェンさんとミシャさんの言葉に返事をしながら、最後にガズンさんは俺の頭をポンと叩いて歩き出す。

「き、気をつけてくださいね、ガズンさん！」



こうしてガズンさんは、リディアルを発つてラグヴィード領へと向かった。

それから俺はオルフェンさんとミシャさんと一緒になって、朝食を食べることになった。もちろん、レオとルナも一緒だ。

「それにしても、ガズンさんがまさかラグヴィード家の方だったとは思いませんでした。もしかして、お二人もどこかの貴族なんですか？」

「ガズンさんと一緒に行動しているから聞いてみたが、二人はすぐに首を横に振る。『んなわけねえって！ 俺もミシャも、普通の平民だよ』

「そうそう！ 私たちもパーティーを組んでからしばらくは、ガズンが貴族様だったなんて知らなかったんだからね！」

「どうやらガズンさんは、自分のことをあまり語らない人なのかもしれない。

「それに、貴族様だつて分かつてからも、いつも通りに接してほしいとか無理難題を吹っかけてきたもんな！」

「最初の頃は困惑したもんですよ。でも、そうしないとガズンから離れていったかもしれないし、今となつてはいい思い出かなー」

「……いいですね、そういうの」

三人が出会つてから今日までの思い出を聞いて、俺は少しだけ羨ましくなってしまう。

立ち読みサンプル
はここまで

なんせレオをタイムした六歳の頃から、ブリード家を追放される一二歳まで、家で虐げられ続けた俺には思い出と呼べるものがほとんどないのだ。

「リドルの場合はレオとルナ、二匹との出会いが最高の思い出になるんじゃないかねえか？」

「そうだよ、リドル君！ 嫌なことはすっぱり忘れて、良いことだけを大切にしなきゃ！」

俺の呟きを聞いたオルフェンさんとミシャさんが、笑みを浮かべながらそう言ってくれた。

「……そうですね。確かに、その通りです」

「ガウ？ ガウガウ！」

「ミーミー！」

納得しながらレオとルナの頭を撫でると、二匹が頬を俺の足に寄せてくれる。

その行動がとても嬉しく、俺も自然と笑みを浮かべていた。

「よし！ それじゃあ俺たちは自警団の訓練に勤しみますかね！」

「ビシバシ鍛えて、ガズンを驚かせてやるんだからね！」

「よろしくお願いします！ オルフェンさん、ミシャさん！」

朝食を食べ終えた俺は、オルフェンさんとミシャさんを見送ったあと、レオとルナに声を掛ける。

「俺たちはグースたちのところに行つて、みんなの縄張りのところまでリディアルを大きくしてい
いか、確認してこよう！」

「ガウ！」

「ミー！」

こうして俺は、嬉しそうに鳴くレオとルナと一緒に、魔の森へと向かった。

魔の森歩きも、従魔たちの縄張り内であれば慣れたもので、俺たちは苦も無くグースのもとにたどり着いた。

「グース、ちょっと相談があるんだけど」

「モギユ？」

俺はモグラに似た従魔のグースに、外壁を広げてリディアルの敷地を広げる計画を説明していく。「だいぶ遅くなっちゃったんだけど、この花畑もリディアルの敷地内に入れようと思っ
ているんだ。どうかかな？」

「モグモグ！ モググー！」

「本当か？ よかった、ありがとう！」

グースは諸手を上げて喜んでくれた。

ただ、そうなると花畑が人間の手によって荒らされないよう、管理の面でも気を配らなければなら
ない。